

くくや台幼稚園モンテッソーリ通信第2号

子どもが成長する集中現象とは ～敏感期を満ちし、集中現象へ～

集中現象とは

★敏感気に沿ったちょうど良い環境が用意され、そこから自分で選択し、最後まで自分の責任においてやりきることを大切された子どもは、自分にピッタリのお仕事と出会った時、集中現象をおこします。自分で本当に必要なものを選んで(やみくもに手をつけて選ぶ時ではありません)、自分のリズムで繰り返し、納得いくまで(集中)成し遂げた時に子どもは真の喜びや幸せを感じます。それこそ「生きる喜び」「生きる力」の実現となるのです



★敏感期に沿った ちょうど良い環境 を用意する

❁第1号では敏感期のお話をしました。敏感期とは、乳幼児の一定の時期にだけ現れ、ある特定の事柄に対して強い感受性があり、いとも簡単に吸収することです。敏感期は様々なもの・ことに対して出現し、その対象とぴったりの環境に出会ったとき子どもには集中現象が現れます。一つの目的が果たされると、別の感受性が取って代わり、それ以前の感受性は消えてなくなります。

ものを運ぶ手伝いをさせてあげる、ハンドタオルなどを畳むのをよく見せながら教える等、敏感期にちょうど良い環境を用意してあげることで、子どもは満ちされ、次の敏感期にむかうのです。

子どもは「自分でする」喜びを求めている

❁敏感期の一つでもあり、幼児期の人格形成に深く関わるのが模倣期です。自分の意思で体を動かせるということを学んだ子どもは、なんでも自分でやりたがります。しかもイヤイヤ期と呼ばれる時期に重なると大変ですね。

でも、模倣期を捉えた対応をするとどうでしょう。大人のように自分でやりたい、決定権を持ちたいという欲求を汲み、言葉がけを考えます。

片付けがイヤだという子どもに「これどうやって仕舞うんだっけ?」と問いかけます。すると、いつも大人がが教えるような口調で「あのね、こうやるんだよー?」と言いながら、簡単に片付けてくれたりします。模倣の欲求を満ちす瞬間ですね。この自分でやりたいという思いは、模倣期を過ぎても子どもの中にあり、自立へ向かっていくための大切な力となります

❁自分ですると言っても、大人の道具ではなかなかうまく使いこなせません。フキンやスポンジ、お盆、ハサミ等(本物であること)も、手の面積を考えると子どもサイズが使いやすいことは想像に容易いと思います。

更に、しまっておく場所はどうでしょう。わかりやすく整理(パッと見ただけで何があるか想像できる)され、子どもが一人で出し入れ出来る場所にあるでしょうか

❁大人も、子どもにとっては環境の一部です。

まずは ゆっくり丁寧に、言葉数すくなく “やってみせること” です。教える内容は、子ども自身がチャレンジしてみたくなるくらいには簡単すぎないものいいでしょう。ベランダを掃く、机を拭く、靴を揃える等生活の中でいつも家族がやっていることが最初の提供としていいでしょう。やってみせたら、子どもがやっている時の声かけはしません。水を絞った時に溢れたのなら、愚痴をこぼさずとも 拭くということを教えてみれば良いのです。年中にもなると、その生活の範囲は広がり、興味があれば ゴミの分別、洋服の洗い分けもできるようになります。

❁教えた活動に自分ひとりで取り組めるようになったら、その場から離れて子どもが自らやめる時まで見守りましょう。もし、教えたことが 子どもにピッタリと合っていたら、きっと集中現象 が現れることでしょ

子供の生きる力の基本は、自分で生活することからです。できそうなことから、環境を用意し 見せながら教えていきましょう